

IV. 取組の評価

1. 評価部門の活動

本学現代 GP の取り組みにおける評価部門は、開始直後に 8 名の教員でスタートし、最終年度に 1 名増員して 9 名で活動した。メンバーのうち各部門に直接関わっていない教員を評価担当者として配置し、事業内容の把握、自己点検評価方法などについて、部門担当者と定期的に話し合い、その結果を評価部門会議で共有しつつ事業全体の評価のあり方を検討した。

各部門担当者と評価担当者の話し合いにおいては、最終年度以外は各部門の自己点検評価を中心として評価すること、その中に評価部門が必要と考える内容があれば盛り込むことで合意した。部門や事業によっても評価方法は様々であったが、評価方法を統一するよりも、各事業に適合した評価方法を重視することとした。そして最終年度については、事業全体の評価を評価部門として実施することを確認した。

プロセス評価の一環として、平成 19 年 3 月には、本学現代 GP の何らかの事業に関わっている地域住民を招いて感想や意見を聴取する座談会（「地域住民の方のご意見を伺う会」、平成 19 年 3 月 14 日、午後 3 時～5 時）を開催した。ここには、健康生活支援学実習や授業等で教育ボランティア、まちの保健室への参加者、次世代育成部門のプログラム関係者、ヘルスアップ推進員など合計 15 名と評価部門の教員 4 名が参加した。当日は、資料に基づいて事業全体の説明をした後、関係している事業ごとに 3 グループに分かれグループディスカッションを実施した。その後、話し合いの内容を共有するために 90 分の会議を開催した。その結果、本学が実施している現代 GP の取り組みの内容は、全体として住民のニーズに一致しており、住民の健康増進に役立っていることが確認できた。「地域住民の方のご意見を伺う会」の結果は本学現代 GP 委員会の全体会議で報告され、住民からの意見をもとに、各部門担当者に運営方法等いくつかの改善点が提案された。

さらに平成 19 年 8 月には、既に現代 GP の取り組みを終了している京都外国語大学の平山弓月教授を迎えて、評価のあり方について意見を伺う会を開いた（平成 19 年 8 月 9 日、午後 3 時～5 時）。ここには評価部門から 7 名の教員と事務局 1 名が出席し、評価の考え方、具体的な方法について活発な意見交換を行うことができた。この結果を受け、最終年度のアウトカム評価として、「第三者評価」「学生による評価」「地域住民による評価」「教員による評価」「本学現代 GP シンポジウム」を実施し、これらをもって最終年度の全体評価とすることに決定した。

「本学現代 GP シンポジウム」については、本報告書「Ⅱ. 取組の実績と成果」の「7. 取組に関する講演会・シンポジウム」において既に述べたため、以下では「第三者評価」「学生による評価」「地域住民による評価」「教員による評価」について述べる。

2. 第三者評価

第三者評価は、外部評価委員を人選・依頼し、あらかじめ本学の事業に関する説明資料を送付した上で、第三者評価会議を開催して受けることとした。外部評価委員は、新見公立短期大学看護学科・古城幸子教授（老年看護）、和歌山県立医科大学保健看護学部・内海みよ子教授（小児看護）の2名に依頼した。会議は平成20年10月16日の午後2時～5時に本学大会議室において行われた。当日の参加者は、林副学長および各部門の代表者、評価部門の委員、および各部門で参加可能な委員の計18名であった。

新見公立短期大学看護学科ならびに和歌山県立医科大学保健看護学部は、ともに現代GPに取り組んだ経験を持ち、その事業内容も、地域住民の協力を得て教育改善を行う点において本学と類似している。両教授とも事業において中心的役割を果たしている人物で、会議では有意義な指摘と評価を受けることができた。

会議は林副学長の挨拶で始まり、両教授と参加メンバーの紹介の後、評価部門のグレッグ教授から、本学現代GPの取り組みの概要説明が行われ、続いて質疑応答と講評に入った。

以下、第三者評価会議での質疑応答と講評をまとめる。

1) 第三者評価会議

(1)新見公立短期大学・古城幸子教授（外部評価委員）による質疑と講評

①健康生活支援学における教育ボランティアについて

<質疑応答>

Q:地域住民との連絡調整、事前準備、時間調整などはどのように行っているか。

A:教育ボランティアの募集には苦労したが、地域の民生委員や地元の「ふれあいまちづくり協議会」を通して登録依頼を行った。また、ヘルスアップ作戦に参加した地域住民に直接依頼もした。老年看護学の健康生活支援学関連科目については、学園都市地域の高齢者自治会組織である「長寿会」を通して個人的に依頼した。

Q:ボランティアの役割には、地域住民当事者としての役割と模擬患者としての役割があるが、ボランティア登録時の振り分けをどのようにしているのか。

A:ボランティア内容の振り分けについては、あらかじめ紙面上で内容のリストを伝えておき、実際に依頼する時点でさらに詳しい内容を伝えた上で決定してもらう形式をとった。

Q:ボランティアの人数が多くなると、学生自身の患者体験の機会が減りはしないか。

A:演習科目においてボランティアが参加する時間は、180分中30分程度とわずかであり、学生の患者体験が少なくなっているわけではない

Q:模擬患者から誤った知識が伝わった場合のフォローはどのようにしているか。

A:ボランティアが、講義で意図している内容と異なることを学生にコメントしたこともあるが、それはそれで率直な意見であり、教員が介入することで、そういう考え方もあるのだという学生の気付きにつながった。

Q:教育ボランティアの年代や立場についてはどうか。

A: 大学に来るボランティアの世代は、全般的には中高年が中心（50、60、70代）で、20、30代は少ない。しかし、実習で学生が地域のボランティアを訪れる場合は20代後半から70、80代までと幅が広がっている。

② ボランティア活動と単位認定について

< 質疑応答 >

Q: 総合科目に「ボランティア活動（1単位）」があるが、この科目を履修する学生とボランティア活動の関係はどのようになっているのか。また、単位認定はどのように行うのか。

A: 「ボランティア活動」の履修登録学生は70名弱、現代GPボランティア登録学生は約150名だが、両者がイコールではない。「ボランティア活動」は、履修登録した学生に対してのみ、必要条件を満たした場合に単位認定を行う。活動先は、教員側が提供した情報の中から学生が自主的に選び、活動後に感想を書いて担当者から確認のサインをもらう。単位認定条件としての時間数はトータル45時間以上とし、さらに全体を通したレポートを提出することにより、1単位として認定する。現時点で2名が単位認定されているが、45時間を満たす学生は他にもおり、自己申請のため時期が来れば認定者数が増えるであろう。

< 講評 >

現代GPにおいては、学生の活動を単位認定するかどうかの評価のポイントとなる。どんなに良い企画であっても、一部の学生にしか効果がないものでは評価されない。したがって、今後取り組みを継続していくためには、活動の結果、学生が単位を取得できるような形にすることが大切である。

③ 地域貢献における教員の負担と、ボランティア体験学生と非体験学生の学びについて

< 質疑応答 >

Q: ヘルスアップ作戦、まちの保健室、次世代育成支援など、多数の教員が事業活動に動員されていることで教員への負担が重くなってはいないか。また、これらの活動での学びが実際の授業の中にどのように還元されているのか。活動を体験した学生と体験していない学生との差は出ているのかどうか。

A: 一時に多数の教員を動員する体勢は、初期のまちの保健室において70名以上の住民参加があった際に対応しきれず、苦情が出されたことを契機に作られたものである。その後、参加者数が落ち着くにつれて人数を調整し、現在は待機役の教員を置き、参加住民数の増加に応じて対応する形にしている。

まちの保健室は第3木曜の4限に設定したため、その時間の講義を他の時間帯に移動せざるを得ず、それによる弊害が出ているが、平日の昼間にしか実施できないという限界があり苦しいところである。

学生間の体験の差の有無については、次世代育成支援に関しては助産の学生は全員が出るので学びの差はない。まちの保健室においては、企画段階から参加している学生の学びは大きいですが、反面、当日の受付や会場設定等の手伝いだけの学生では学びが多いとは言えない。今後、学生の主体的参加を促す努力が必要と考えている。なお、ピアカウ

ンセリングに1年生から参加した学生は、2年生、3年生になっても他の活動にも積極的に取り組む姿勢が見受けられる。

ヘルスアップ作戦は、神戸市西区が力を入れている事業であり、住民主体の事業であるためどうしても会合が日中になる。それゆえ、学生に参加させるための時間調整はなかなか難しいが、例えば土日の活動などには学生の参加も可能である。また、地域看護学の実習で西区の保健福祉部に出向く学生は、ヘルスアップの活動に何らかの形で関連をもつことになる。西区以外へ出向く学生には情報を共有できるようにしている。

地域住民からの学生ボランティアの要請も多くなり、本学への期待が増えた。GP活動を越えた学生と住民のつながりが生まれてきているように思う。

Q: (本学教員からの質問) 大学でのボランティア活動は、あくまでも自主的なものと考えられる。それを支援する大学側の役割として、活動を単位化することは必要であろうが、学生間の差はやはり生じてしまう。果たしてボランティア活動をしない学生をフォローする必要はあるのだろうか。

A: (古城教授からの回答)

ことGPに関していえば、助成金をもらう限り全体の学生に何らかの教育効果があることが望ましいと言われている。全ての学生が同じ体験はできないが、その体験を他の学生に還元することもあってよいのではないか。必ずしも学生に任せず、教員が講義の中で体験を教材として利用するなどの還元方法もあると思われる。

<本学教員からの追加発言>

本学のGPは、看護教育に地域住民の協力を得ることと、地域への貢献という2本立てになっている。学生全体に対する教育効果は、前者の中では実現しているが、後者の地域貢献では最初から全部を求めることはできないと考えていた。可能な範囲ということで割り切っている。

④eヘルス部門の活動について

<質疑応答>

Q: 現代GPの助成終了後も、ホームページの管理運営は可能な状態か。

A: システムの運営(サーバーの運営管理)そのものは業者委託であるが、CMS(コンテンツマネジメントシステム)を採用したため、それぞれの内容は各部門の教員が作成・修正可能である。

Q: eヘルスの各サイトへのアクセス数、利用状況はどうか。また、スカイプを使った顔の見えるやりとりなど、新たな取り組みについては何かあるのか。

A: 利用状況に関連して、定期的にまとまった情報を流すためにメールマガジンを発行している。地域ソーシャルネットワーキングサービス(SNS)に関しては、あるテーマで一度立ち上げたものの、担当者が途中で異動したため現在休止状態(テーマ待ち)となっている。eラーニングにおけるストリーミングは利用可能な設定になっており、ウォーキング講習会の内容を配信予定であった。しかし、参加者の顔がネット上で公開されるというプライバシー上の問題があり進んでいない。今後、別のテーマについて配信する

予定である。

顔の見えるやりとり（テレビ電話）については技術的には可能であるが、常に担当者が張り付く必要性から現時点では無理である。アクセス数は、1日約30件、月間約1200件。メールマガジンは、PCベースで約100人、携帯ベースで約30人が登録している。

助成終了後の管理運営に関しては、予算請求はしたが通る可能性は低く、費用的には単独での維持は難しいと考えている。CMSで作成された部分に関しては、大学のサーバーへの移行が可能であるが、それ以外の部分については、費用的にも個人情報保護の観点からも難しい。特に、神戸市の個人情報保護条例がかなり厳しいため、移行作業に際してはこの点もクリアしなければならないと考えている。

⑤全体の講評

学生の教育の向上、地域と共に学び地域と共に創るという2点から講評する。

学生の教育の向上という点では、健康生活支援の教育ボランティアが大変良い。校内での講義・演習でも教育効果をあげており、学生の感想からは、現実感を伴った理解が得られていること、学外者を迎える緊張感が感じられること、社会人としてのマナーを習得していることなどが読み取れて、ボランティアが効果的な役割を果たしていると思われる。

校内の様々な活動においても、臨地実習と同様の自己効力感が得られており、看護の実践能力を鍛えることが可能になっていると思われる。いずれにしても、教員間の連携や地域や行政等様々な方面との連携や協力が密に行われており、一貫した取り組みになっているという点は大変良いと感じた。

「地域と共に学び共に創る」という点については、教育支援ボランティアの方々が大学に貢献しているという実感を得て、それを生き甲斐としている姿がうかがえる。そして、学生や看護学教育に対する理解も深まっており、意義があると感じられる。次第にボランティア登録数が増えていることがそれを証明していると思われる。

ヘルスアップ作戦は大学の地域貢献という意味合いが強いが、神出地区では自主的な取り組みになっているということで、地域の自主性を生み出すことに成功しており大変驚いた。命の誕生から高齢者まで、非常に幅広い年代の地域の人々と共に教育が行えるという点は大変うらやましいと思う。

(2)和歌山県立医科大学・内海みよ子教授(外部評価委員)による質疑と講評

①本学現代GPの取組における学年間交流について

<質疑応答>

Q:学年間交流はどのような形でなされているか。

A:次世代育成支援の中ではピアカウンセリングを行っており、約20名の学生が中学校や高校へ出向いてピアカウンセリング講座を実施する。この企画運営の中では、1年生から4年生の学生達自身が、先輩後輩の関係ではなく同じピアとしての目線で接するように努力している。単に先輩から教えてもらうのではなく、年代の近い1年生のほうが高校生のごことはよく理解していて、2年生・3年生が再度高校生のピアになるための思いを新たにするといった具合に様々なサイクルが成り立っている。

まちの保健室では、平成 19 年度の大学祭と協賛してアロマセラピーを実施したが、その時には編入学生がリーダーとなり、アロマセラピーの練習などを通して各学年が交流する機会となった。20 年度も「元気なメイクアップ」ということで同様の活動が行われている。

Q: ボランティア活動の中では学年を越えた活動はされているか。

A: 各活動とも学年を越えた活動が行われている。学生自らができるだけ各学年の参加が可能な体制を意識している。また、「ボランティアのつどい」を開催して、活動経験の豊富な学生がその活動内容を報告することで、他の学生や学年に参加を促す機会ともなっている。

② 学生の主体的取組について

< 講評 >

学生主体の取り組みは、学生にとって大変新鮮である。その教育評価は難しいが、取り組んだ学生を評価していくことは非常に大切である。

住民がカリキュラムに様々な役割を果たしているのはうらやましい。他大学では住民からの苦情はたくさんきても大学との交流には壁があるという傾向のなかで、コミュニティヘルスケアにおける健康教育を学生が主体的に行い、かつそれをバックグラウンドで支える人達がいるということは非常にうらやましく、新鮮に感じた。

③ 新カリキュラム以前のボランティア活動について

< 質疑応答 >

Q: 今回の新カリキュラム以前に、学内にボランティア活動というものが存在していたのか。

A: 学生のボランティア活動については、もともと学内サークルに「ボランティア部」があり、阪神淡路大震災後の仮設住宅時代から、現在の復興住宅へも支援を続けている。こうした活動を母体として、4 年前のカリキュラム改正時に、初めて「ボランティア活動」という選択科目を設けた。

Q: 地域住民ボランティアへのフィードバックは何かあるのか。

A: 物質的なフィードバックはなかなか難しい。大学貢献へのやりがいを感じていただく中から、自身の健康に配慮し、その結果地域全体の健康状態が向上していくことをフィードバックに代えたいと考えている。大学側の気持ちをいかに返すかというところでは、ニューズレターを発行してその中で教員の気持ち等を伝えている。

④ 地区調査について

< 質疑応答 >

Q: この地区の高齢化率は高くないのか。

A: ニュータウンとはいえ 20 年以上経過しており高齢者が多い。ただ、若年層も入ってきているため、高齢化率は平均的な値となる。なお、健康生活支援学実習 I では西区全体をカバーするが、地区によっては農村部もあるため、学生は都市部と農村部の両方を見ることができている状況にある。

Q: 健康生活支援学では、家庭訪問を卒業まで継続的に行うとあるが、どのようにおこなっ

ているのか。

A:結果的にはできていない。カリキュラム更新の翌年に現代 GP の申請をおこなったため、申請時点では、卒業まで家庭訪問を継続させたいと考えていた。しかし実際には、訪問を受け入れてくれるボランティアの獲得が難しく、訪問中心の実習を変更せざるを得なくなった。このようなボランティアを獲得するには、かなりの信頼関係が必要である。現代 GP 終了後も教育ボランティアを継続し、その中から家庭訪問を受け入れてくださるボランティアを徐々に獲得していきたい。実際に教育ボランティアを経験すると、地域住民の中にボランティアに積極的に参加する機運が生まれてきていることから、1 回限りの実習だけではなく、4 年間を通じた関わりに広げていけるのではないかと考えている。

実際に一人の学生が 4 年間継続して家庭訪問をできるかと言うと、過密なカリキュラムからするとかなり難しいと考える。しかし、学内で地域住民と接する機会は増えており、その機会を利用したポイント、ポイントでの継続は可能かと考えられる。

<講評>

健康生活支援においては、やはりライフステージに伴う健康変化をなんとか学生に伝えたいところである。今後も取り組みを継続し、良い方法があったらぜひ教えてほしい。

⑤ボランティア活動とサークル活動との兼ね合いについて

<質疑応答>

Q:和歌山県立医科大学の例では、課外活動にも GP 活動にも参加しない学生がいる反面、自主的に参加する学生は固定化してきており、両者の間にかなり差が出てきている。このあたりはどうしているか。

A:確かに参加学生の固定化の問題はあるが、これに関しては、教員がもっと強く学生にボランティアを要請すべきという意見がむしろ学生の側から出されている。授業の一部でこのような呼びかけを行った例もあるが、基本的には強制はできず中途半端になっている。ガイダンスやオリエンテーションの強化、ボランティアを呼びかけるタイミング(早すぎず遅すぎない)の工夫、参加した学生との交流の場の設定などを考えている。ただし、学生の特徴を活かして人材を育てる意味からすると、ある程度の固定化も必要。固定化と非固定化の両方が必要とも考えている。

2) 第三者評価のまとめ

第三者評価は、当事者には見えにくい成果や改善点を得ることができる。今回の本学現代 GP に関する第三者評価においては、外部評価委員がすでに類似した内容での GP 事業を経験している教員であったため、内容が濃く、今後の本学の取り組みの継続・展開の参考となる有益な指摘や意見を得ることができた。

講評においては、地域住民が大学の講義・演習に参加することが学生・地域住民双方にとって相乗効果をもたらしている点が高く評価された。これを受けて今後は、地域住民との交流を単年度の単発的交流にとどめるのではなく、何年かに渡る交流を実施することが

必要であり、これにより一人の人間のライフステージに関わるより質の高い看護教育につながられるものと考えられた。

本学現代 GP の取り組みには、申請以前から既に着手していた地域貢献活動も含まれていたため、時として地域貢献に偏りがちなきらいもあったが、講評を受けて、現代 GP 本来の目的である学生教育への還元を常に意識し続ける必要性を再認識させられた。また、現代 GP のような助成を受けるためには、期間内での事業の完結に目を向けるばかりではなく、事業を契機として、学生教育を持続的に改善していく視点が重要であることが理解できた。今後、本学が現代 GP に類似した助成を申請するにあたっては、大学としてその事業を中長期的にどのように継続していくかを見定めることが必要であるといえる。

3. 学生による評価

現代 GP 評価部門では、アウトカム評価の一環として学生を対象にしたアンケート調査（以下「学生調査」とする）を実施した。以下にその概要を述べる。

1) 学生調査の目的

本調査の目的は、本学の現代 GP の取り組みに対する学生の参加度とその効果について明らかにし、今後の教育活動の改善に役立てることである。

2) 学生調査の方法

(1) 調査対象

調査対象は、大学院博士後期課程の学生を除く全学生のうち、調査に同意が得られた者であった。

(2) 調査の方法と質問紙の構成

調査方法は、無記名式の構成的質問紙を用いた自記式質問紙法とした。質問紙は学年、本学現代 GP の各活動への参加の有無と参加による効果、および不参加の理由から構成した。効果についての項目は、現代 GP 活動が狙いとした目標が、どの程度達成できたかについて4段階で回答するよう作成した（質問紙は p234～p236 の資料IV-1 を参照）。

(3) データ収集方法

学生には、授業終了後調査の趣旨と方法、協力は自由意思によること、個人が特定されることはないこと等を説明し、期限までに学内4ヶ所に設置された回収箱に投函するよう依頼した。3年生は実習中であったため、実習担当教員を通して質問紙を配布した。質問紙の投函をもって調査に同意したものとみなした。

3) 学生調査の結果および考察

質問紙の回収数は305枚、回収率は66.5%であった。以下に対象者の学年分布および各活動への参加割合とその効果についての結果を述べる。

(1) 学年

調査に協力した学生の学年は表IV-3-1のとおりである。学部では2年生が70名と最も多く、1年生が27名と少なかった。編入生および助産学専攻科生、博士前期課程1年生は定員に比して調査協力者の割合が高かった。

(2) 教育ボランティアの導入について

教育ボランティアを導入した授業を受けたことがあるかという質問に「はい」と答えた人は185人(60.7%)、「いいえ」が118人(38.7%)であった。教育ボランティアの導入は、

表IV-3-1 回答者の学年

学年	人数	%
1年生	27	8.9
2年生	70	23.0
3年生	46	15.1
4年生	58	19.0
編入3年生	34	11.1
編入4年生	32	10.5
助産学専攻科	14	4.6
前期課程1年生	16	5.2
前期課程2年生	8	2.6
合計	305	100

学部の新カリキュラムに伴って実施されたため、大学院生、旧カリキュラムの4年生、編入4年生はほとんど受講していなかった。また今回、多くが受講しているはずの1年生の回答率が低かった。そのため受講したことがない者が4割という結果になったと思われる。

受講した学生に、学習への効果について尋ねた結果が表IV-3-2である。効果の項目の中で「やや当てはまる」「非常に当てはまる」との回答が最も多かったのは「学習への動機付けが高まった」であり約95%、最も低かった「人と関わる力が向上した」という項目においても約77%の人が当てはまると答えていた。自由記載では「教育ボランティアの参加によりリアリティーを感じた」「直接住民の生きたニーズや意見を聞くことができた」「緊張感をもつことができた」等の感想があげられていた。

これらの結果から、教育ボランティアの導入は、学習への動機付けを高める、科目の学びを深める、相手の立場で考える力を育てる、住民との相互性を学ぶなどの点で効果的であり、結果的に学生たちは看護実践能力が向上したと感じていることがうかがえた。

表IV-3-2 教育ボランティアの導入効果（学生調査）

項目	全く当てはまらない		あまり当てはまらない		やや当てはまる		非常に当てはまる		わからない		合計
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数
学習への動機付けが高まった	1	0.5	4	2.2	88	47.8	86	46.7	5	2.7	184
各科目の学びが深まった	1	0.5	12	6.5	73	39.7	92	50.0	6	3.3	184
相手の立場で考えられるようになった	1	0.5	12	6.5	70	38.0	95	51.6	6	3.3	184
人と関わる力が向上した	1	0.5	27	14.7	74	40.2	67	36.4	15	8.2	184
健康生活を支援する看護実践能力が向上した	4	2.2	28	15.2	88	47.8	59	32.1	5	2.7	184
住民と相互に学びあうことの意義を感じた	2	1.3	16	10.2	47	29.9	83	52.9	9	5.7	157

(3)ヘルスアップ作戦について

ヘルスアップ作戦に参加したことがあると回答した学生は19名(6.3%)であり、参加率は低かった。学習への効果(表IV-3-3)については、「地域住民の主体的な健康作りを学ぶことができた」という項目に、全員が「やや当てはまる」「非常に当てはまる」と答えており、その他「地域の健康課題を考えることができた」「地区組織活動を支援する看護の役割を考えることができた」などの項目にも当てはまるという回答が多かった。

一方、当てはまるという回答が最も少なかった項目は「地域住民が参加しやすい健康増進活動を企画運営する能力が向上した」で、約4割の学生が「あまり当てはまらない」「わからない」と答えていた。その他の自由記載では「コミュニケーション能力を向上させることができた」「住民の人達が興味を持っていることが分かった」などがあげられていた。

これらのことからヘルスアップ作戦は、参加率に課題を残すものの、学生が住民の主体性、地域の健康課題、看護の役割などを学ぶ上で非常に役立っていると考えられた。

表IV-3-3 ヘルスアップ作戦への参加効果（学生調査）（n=19）

項目	全く当てはまらない		あまり当てはまらない		やや当てはまる		非常に当てはまる		わからない	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
地域住民の主体的な健康づくりを学ぶことができた	0	0.0	0	0.0	7	36.8	12	63.2	0	0.0
住民が参加しやすい健康増進活動の企画・運営能力が向上した	0	0.0	6	31.6	8	42.1	3	15.8	2	10.5
地域の健康課題を考えることができた	0	0.0	4	21.1	9	47.4	6	31.6	0	0.0
地区組織活動を支援する看護の役割を考えることができた	0	0.0	2	10.5	10	52.6	6	31.6	1	5.3

(4) まちの保健室について

まちの保健室については、57名(18.9%)の学生が参加したことがあると回答していた。学習への効果としては、「ボランティアへの興味がわいた」「健康相談の実際が理解できた」に当てはまると回答していた人が8割以上、最も低い「住民と関わる力が向上した」でも7割弱の人が当てはまると回答していた。自由記載では「子供と触れあう時間が持ててうれしかった」「看護師の免許があるということでも信頼されることがわかった」「まちの保健室に参加する人は意欲のある人で来ない方にどうアプローチするかを考えるきっかけになった」「非常に楽しかった上、技術も身についた」などがあげられていた。

これらの結果から、まちの保健室への参加は、ボランティアへの興味、健康相談の理解、健康ニーズの理解、企画運営能力の向上、自己効力感、住民と関わる力の向上に有効であることが明らかとなった（表IV-3-4）。

(5) 次世代育成支援事業について

次世代育成支援事業には、53名(17.5%)の学生が参加していた。学習への効果については質問した3項目すべてにおいて90%以上の学生が「やや当てはまる」「非常に当てはまる」と答えており、効果の高さが際だっていた（表IV-3-5）。その他の効果として自由記載では「ピアカウンセラーとして活動する中で自分自身についても探求できた」「ピアはとても楽しかった」「ピア同士意見の対立などをのりこえて、自分自身の成長になった」などがあげられていた。

これらの結果から次世代育成支援事業への学生の参加は、学内で学んだ知識の理解、次世代育成支援のための看護実践能力の向上、主体的に学ぶ姿勢の獲得などに高い効果をあげていると考えられた。

表IV-3-4 まちの保健室への参加効果（学生調査）

項目	全く当てはまらない		あまり当てはまらない		やや当てはまる		非常に当てはまる		わからない		合計
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数
健康相談の実際が理解できた	1	1.8	8	14.3	33	58.9	13	23.2	1	1.8	56
地域住民の健康ニーズが理解できた	1	1.8	9	15.8	35	61.4	10	17.5	2	3.5	57
教員と協力しながら共に取り組むことで、企画、運営する能力が向上した	3	5.3	11	19.3	35	61.4	7	12.3	1	1.8	57
ボランティアへの興味がわいた	0	0.0	6	10.5	25	43.9	24	42.1	2	3.5	57
住民と関わる力が向上した	3	5.3	11	19.3	22	38.6	17	29.8	4	7.0	57
活動を通して自分が人の役に立っていると感じた	1	1.9	8	15.1	23	43.4	18	34.0	3	5.7	53

表IV-3-5 次世代育成支援への参加効果（学生調査）（n=53）

項目	全く当てはまらない		あまり当てはまらない		やや当てはまる		非常に当てはまる		わからない	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
子育て世代の人々、思春期、妊娠期にある人々との関わりを通して、学校で学んだ知識の理解が深まった	1	1.9	0	0	9	17.0	43	81.1	0	0
次世代育成の看護実践能力（カウンセリング技法、集団指導能力、コミュニケーション能力、企画・運営能力）が向上した	1	1.9	0	0	22	41.5	30	56.6	0	0
地域住民とのふれあいを通して主体的に学ぶ姿勢が身についた	1	1.9	2	3.8	22	41.5	28	52.8	0	0

(6)e ヘルスについて

本学の現代GPのホームページを見たことがあると回答した学生は88名(29.1%)であった。健康情報メールマガジンへの登録者は11名(3.7%)と少なく、そのうちメールマガジンを読んだことがある人は9名であった。学習への効果としては「自分自身の健康増進意識が高まった」「地域に健康情報を発信する重要性を認識した」という項目に7割以上が当てはまると回答していた(表IV-3-6)。

学生のメールマガジンへの登録者が少なかった理由としては、購読するには各自がホームページ上で登録手続きを行う必要があり煩雑であったこと、またメールマガジンの目的や意義などの説明が不十分であったことなどが考えられた。

表IV-3-6 健康増進メールマガジンの効果（学生調査）（n=9）

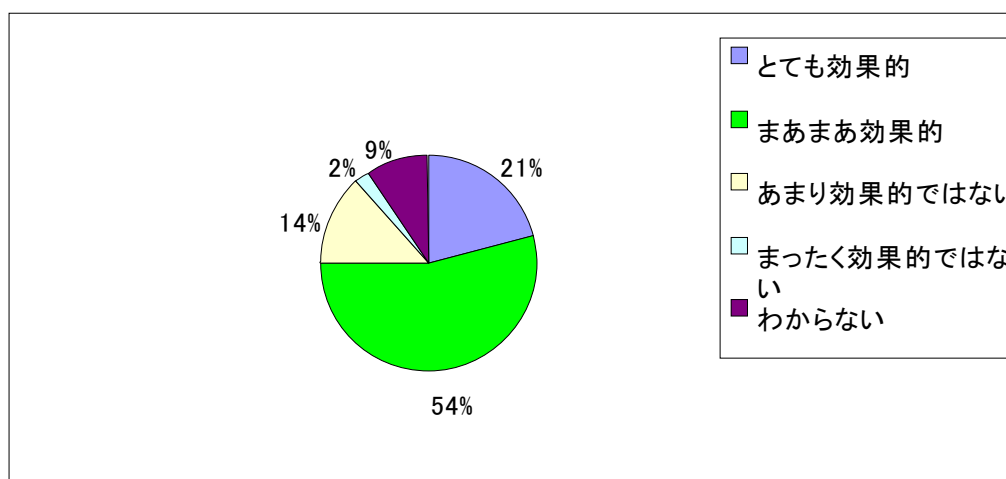
項目	全く当てはまらない		あまり当てはまらない		やや当てはまる		非常に当てはまる		わからない	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
自分自身の健康増進意識が高まった	0	0	2	22.2	5	55.6	2	22.2	0	0
地域に健康情報を発信する重要性を認識した	0	0	1	11.1	6	66.7	1	11.1	1	11.1

(7) 現代 GP 講演会について

GP 講演会への参加は 6 名 (2.0%) と少なかったが、参加した学生は全員「住民主体の健康作りのための新たな知見や方法論を学ぶことができた」という項目に当てはまると回答していた。またその他の効果として自由記載には「看護にも笑いが大切であることを学んだ」「とても楽しかった、笑わせ方を学んだ」（いずれも、平成 19 年度講演会「笑い与健康」について）などがあげられていた。

(8) 学生ボランティアへの登録

学生ボランティアとして登録していると回答した学生は 119 名で全体の約 4 割。登録制が効果的かという質問には 75% の人が「とても効果的」「まあまあ効果的」と答えていた（図 IV-3-1）。



図IV-3-1 ボランティア登録制の効果（学生調査）

(9) 学生ボランティアとして参加しなかった理由（表IV-3-7）

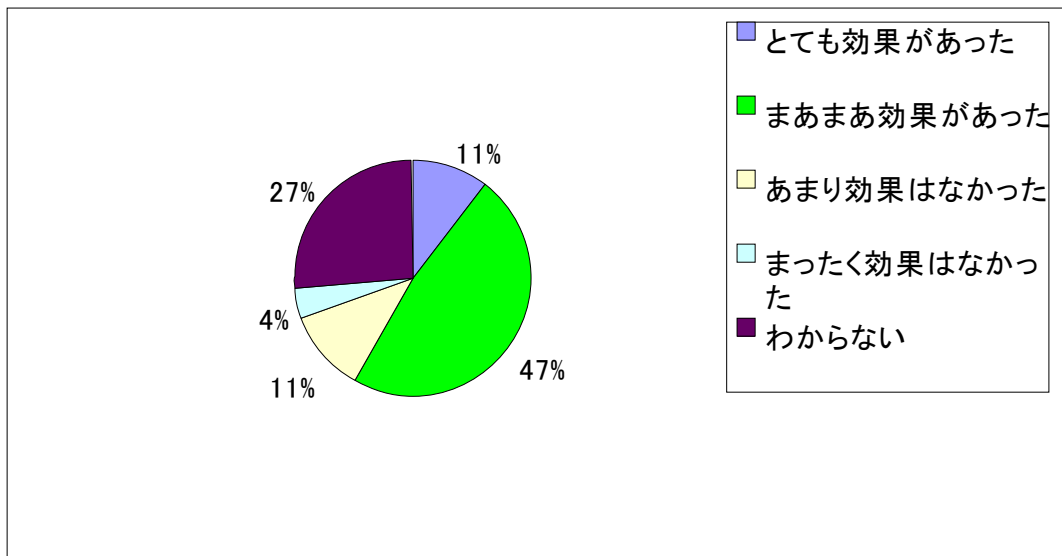
現代 GP の活動にボランティアとして参加しなかった理由で、最も多かったのは「参加する余裕がなかった (56.4%)」で、「興味がなかった」「ボランティアの募集や GP 活動について知らなかった」という理由は少なかった。その他の理由として「他のボランティアをしている」「生活のためにバイトを優先した」等があげられていた。

表IV-3-7 ボランティアとして参加しなかった理由（学生調査）（複数回答）（n=179）

項目	人数	%
参加する余裕がなかった	101	56.4
授業や実習と重なって参加できなかった	49	27.4
興味がなかった	35	19.6
現代 GP の活動について知らなかった	34	19.0
学生ボランティア募集について知らなかった	25	14.0
その他	13	7.3

(10) 現代 GP の活動全体を通しての学習効果（図IV-3-2）

本学現代 GP の活動全体を通してどの程度学習効果があったかという質問に対しては、「とても効果があった」「まあまあ効果があった」と答えた学生が 58%で、半数以上の学生が効果を感じていることが明らかになった。しかし「わからない」という学生も 27%おり、これは活動に参加する機会がなかったか、あるいは機会があっても効果の有無を判断できるほどの参加回数や参加の仕方ではなかったためと考えられた。



図IV-3-2 現代 GP の活動全体の効果（学生調査）

(11) 現代 GP の活動全体を通して良かったと思うこと（自由記載）（学生調査）

本学現代 GP の活動全体を通して良かったと思うこと（自由記載）については、教育ボランティアの有効性、経験の幅や視野の広がり、人と関わる力の向上、自己成長、企画・運営能力の向上、地域住民に対する理解の深まり、楽しさなどの内容が記載されていた。以下に主な自由記載内容を紹介する。

<教育ボランティアの有効性>

- ・ 教育ボランティアの方に協力していただいて、生徒同士の学びより多くのものを学べたと思う。
- ・ 教育ボランティアさんのおかげで学びが深まりました。すごく良いと思います。

<経験の幅や視野の広がり>

- ・ 住民の方々と接することができ、机上での学び以外のこともたくさん学ぶことができた。
- ・ 普通に生活しては関わることのない人と関わることができた。
- ・ 人との関わりが増え視野が広がった。

<人と関わる力の向上>

- ・ 人と関わる力がついてくると思った。

<自己成長>

- ・ 学外の活動を通して自分の成長につなげることができた。
- ・ 仕事ではナースという専門職として人と関わるが、専門職でありながら 1 人の人間として普通に生活している人々との関わりは、短時間でも人としての成長を感じることができた。

<企画・運営能力の向上>

- ・ まちの保健室の学生ボランティア部門に参加し、積極的に企画・運営する力、また積極的に学ぶ姿勢がついたと思う。
- ・ プレパパ・プレママセミナーでは、1 から企画できて集団指導とは何かやグループワークについて学ぶことができた。

<地域住民に対する理解の深まり>

- ・ 住民や地域の人々のニーズを知る機会になった。地域の方々の意識が少し分かった。
- ・ 地域の人と実際に関わることで、地域に住む方々が持つ力に気づくことができ、活動の具体的な流れを知ることができた。

<楽しさ>

- ・ 地域の活動に参加できて楽しかった。小学生の子供たちに元気をもらった。
- ・ 学生同士で学ぶこととも、仕事で人と関わることもとも違う楽しさがあった。

(12) 現代 GP の活動で困った点、悩んだ点（自由記載）（学生調査）

本学現代 GP の活動をめぐる困った点、悩んだ点として記載されていた主な内容は、余裕がなく参加できない、授業と重なり参加しにくい、ボランティア活動の単位修得の難しさ、仕組みがわかりづらいなどであった。主な自由記載内容は以下のとおりである。

- ・ 数回だけ参加したが、なかなか参加する余裕がなくて参加できなかった。
- ・ ボランティア活動は授業のある時間が多く、参加したくてもできないことがはがゆいです。
- ・ やってみたいかったが、話し合いで集まるなどの時間確保が難しく断念してしまいま

した。1、2年生のうちこういう活動をしたかった。

- ・ GPに参加できる人数が1回につき2~3人と少ない場合があるので、ボランティアの単位を取得するのは難しい。
- ・ ボランティア登録はしているが、結局確認印などしてもらっていないので、行くだけになっている。
- ・ 仕組みがよくわからない。登録から活動後までの一連の流れや担当教員の一覧などがあれば分かりやすいと思う。
- ・ 途中でボランティア登録したいと思う人も多く、登録の方法を年間通して提示してはどうか。
- ・ ボランティアなのにほとんど強制的にやらせようとする人がいて非常に困る。やらないと白い目で見られる。
- ・ いきなり「この子に付いて」と言われたが、対応できなかったです。

4) 学生調査のまとめ

調査の結果から、学生にとって、本学現代 GP の各活動への参加は、非常に良い学習の機会となっており、高い学習効果が得られていることが明らかになった。しかし参加状況をみると、教育ボランティアを導入した授業以外のボランティアに参加する活動については、最も多いまちの保健室でも約18%に留まっている。参加率が低い理由は、調査結果が示すように学生に時間的余裕がないこと、特に、授業や実習と重なって参加できないことが主な理由であった。今後は、現代 GP 活動として行ってきた内容をいかに授業の中に取り入れるか、また参加しやすい時間的な余裕をいかに創り出すかが課題である。

また、ボランティア登録から活動までの流れや仕組みを学生に分かりやすく伝えることや、ボランティア活動の単位取得が容易になるような工夫を行い、学生がよりこうした活動に参加しやすい環境を整えていくことが必要である。

4.地域住民による評価

本学の現代 GP の取り組みは、地元貢献型の性格をもつプログラムであり、本学周辺の地域住民とのつながりの中で行われるものが大半であった。取り組みとしては、地域住民と協働で行う事業、主として大学側から専門的知識や技術を提供する事業、地域住民の側からの援助を受けて行われる事業など、性格を異にするバラエティに富んだ事業が展開された。したがって、これらの取り組みについて地域住民からの評価を得る方法や内容についても工夫を施した。

3ヶ年(実質的期間としては2年半)にわたる本学の現代 GP の取り組み実施期間中、地域住民からの評価を得る機会は、主として2回設定した。以下、各回で得られた評価の概要を説明し、地域住民からの評価を総括したい。

1)地域住民による評価の目的

本学の現代 GP の取り組みにおける、本学から地域住民への貢献がどのように受けとめられているか、また、実施した各事業に対する地域住民からの忌憚のない意見・感想などの評価を得て、現代 GP の取り組み終了後の本学と地域の連携のあり方を探る指標とする。

2) 地域住民による評価の方法

(1)「地域住民の方々のご意見を伺う会（座談会）」の開催

地域住民から評価を得るために、本学現代 GP の取り組み開始から1年半が経過した2007年3月に、本学において次のような座談会を開催した。

- ・日時：2007年3月14日、15:00～16:30
- ・場所：神戸市看護大学 大会議室
- ・参加者：住民15名とGP評価班員4名

(2)「本学現代 GP の取り組みに参加した地域住民へのアンケート」の実施

地域住民から評価を得るために、最終年度の2008年10月に「現代 GP 事業に参加して下さった地域住民の皆様へのアンケート」と題した無記名の自記式質問紙調査を、郵送により実施した。対象者は、本学現代 GP の各取り組みに複数回参加した地域住民約250名で、有効回答数は108名であった。調査内容は、回答者の性別・世代等の属性および本学現代 GP 各取り組みへの参加状況を問うもので、選択肢回答と自由記載を中心とした(質問紙はp237の資料IV-2を参照)。

3) 地域住民による評価の結果

(1) 「地域住民の方々のご意見を伺う会（座談会）」での評価

「地域住民の方々のご意見を伺う会」（以下「地域住民評価会議」とする）においては、参加住民から活発な意見が多数出され、本学の現代 GP の取り組みへの期待の大きさが感じ

られた。地域住民評価会議では、会議の出席者が主に参加している事業毎に少人数のグループに分かれ、大学側から評価班の教員が司会・とりまとめ役として加わった。それぞれに出された意見は、本学現代 GP 委員会の全体会議などの資料として各部門に伝達された。その結果、各事業において、翌年度以降、これら地域住民の意見を取り入れた事業計画を立てることができた。

また、会議時に住民から出された意見に対して、きわめて速やかに(およそ1週間後に)回答をするなどした部門(「ヘルスアップ作戦」部門)もあり、大学と地域の連携が既に培われていることが伺えた。

地域住民評価会議の席上で出された住民からの意見は多種多様であったが、代表的なものとしては、「広報をもっと活発に。地域自治会等を広報にも活用してはどうか」「男性の参加者が少ない」「学生の参加者が少ない」「幅広い健康に関するイベントをお願いしたい。笑い、音楽など」といったものであった。

これらの意見に対して、翌年度以降の各事業において、具体的に対策が練られ、取り組みが実践された。

(2) 「本学現代 GP の取り組みに参加した地域住民へのアンケート」の結果

最終年度に実施された実施「現代 GP 事業に参加して下さった地域住民の皆様へのアンケート(以下「住民調査」とする)」においては、有効回答 108 名のほぼ全てに、自由記載欄への記載がなされ、多くの意見や感想を得ることができた。

① 回答住民の性別・年齢階級別割合(表IV-4-1)

回答した住民を性別・年齢階級別にみると、女性が全体の約8割でいずれの年齢階級でも割合が高く、年齢階級は60歳代以上が5割であった。

表IV-4-1 回答住民の年齢階級別・性別割合

年代	人数	%	性別	人数	%
20代	6	5.6	男	0	0
			女	6	100
30代	20	18.5	男	2	10.0
			女	18	90.0
40代	7	6.5	男	0	0
			女	6	85.7
			無回答	1	14.3
50代	19	17.6	男	0	0
			女	19	100
60代	25	23.1	男	5	20.0
			女	20	80.0
70代	22	20.3	男	8	36.4
			女	14	63.6
80代	2	1.9	男	1	50.0
			女	1	50.0
無回答	7	6.5			
合計	108	100			

②現代 GP 各事業の有用性(表IV-4-2)

本学現代 GP 各事業への参加が役に立ったかどうかを尋ねた結果では、全般に非常に高い率で役に立ったという回答を得ることができた。なお、先述したように、本調査は本学の現代 GP 各事業に複数回参加した人で、事務局で住所を把握している住民を対象に行った。それゆえ、回答者に若干バイアスがあることは否めない。母数となる実際の参加人数については本報告書の各取り組みの実績を参考にされたい。

表IV-4-2 現代 GP 各事業への参加は役に立ったか（住民調査）

	参加				不参加	無回答
	役に立った		役に立たなかった			
	人数	%	人数	%		
ヘルスアップ作戦	45	100	0	0	57	6
教育ボランティア	41	97.6	1	2.4	61	5
まちの保健室	53	100	0	0	52	3
命の感動体験	16	88.9	2	11.1	86	4
プレパパプレママ	18	100	0	0	86	4
メールマガジン	10	100	0	0	86	12
健康作り講演会	25	96.2	1	3.8	78	4
健康調査	36	83.7	7	16.3	54	11

③現代 GP 各事業への参加状況

以下の表IV-4-3は、本学現代GP各事業への参加人数および2つの事業に参加があった場合の組み合わせとその参加人数を示した。また、表IV-4-4は、3つ以上の事業に参加があった場合の組み合わせとその参加人数を示した。さすがに人数的には多くはないが、2事業への参加にしても、3事業への参加にしても、「ヘルスアップ」「まちの保健室」「教育ボランティア」の3つの組み合わせが最も多かった。

表IV-4-3 現代GP各事業への参加状況(住民調査)

参加事業名	人数	%
ヘルスアップ	45	(100)
ヘルスアップ+教育ボランティア	21	(46.7)
ヘルスアップ+まちの保健室	38	(84.4)
ヘルスアップ+命の感動体験	2	(4.4)
ヘルスアップ+プレパパプレママ	1	(2.2)
ヘルスアップ+メールマガジン	5	(11.1)
ヘルスアップ+講演会	19	(42.2)
ヘルスアップ+健康調査	27	(60)
教育ボランティア	42	(100)
教育ボランティア+まちの保健室	21	(50)
教育ボランティア+命の感動体験	2	(4.8)
教育ボランティア+プレパパプレママ	1	(2.4)
教育ボランティア+メールマガジン	8	(19)
教育ボランティア+講演会	18	(42.9)
教育ボランティア+健康調査	25	(59.5)
まちの保健室	53	(100)
まちの保健室+命の感動体験	2	(3.8)
まちの保健室+プレパパプレママ	1	(1.9)
まちの保健室+メールマガジン	6	(11.3)
まちの保健室+講演会	53	(100)
まちの保健室+健康調査	33	(62.3)
命の感動体験のみ	2	(100)
プレパパプレママのみ	18	(100)

表IV-4-4 現代 GP 事業のうち 3 つ以上の事業に参加した場合（住民調査）

参加事業名	人数
ヘルスアップ+教育ボランティア+まちの保健室	16
ヘルスアップ+教育ボランティア+まちの保健室+命の感動体験	0
ヘルスアップ+教育ボランティア+まちの保健室+プレパパプレママ	1
ヘルスアップ+教育ボランティア+まちの保健室+プレパパプレママ+健康調査	1
ヘルスアップ+まちの保健室+命の感動体験	0
ヘルスアップ+まちの保健室+プレパパプレママ	0
ヘルスアップ+まちの保健室+メールマガジン	1
ヘルスアップ+まちの保健室+メールマガジン+講演会	1
ヘルスアップ+まちの保健室+メールマガジン+講演会+健康調査	1
ヘルスアップ+まちの保健室+講演会	6
ヘルスアップ+まちの保健室+講演会+健康調査	4
教育ボランティア+まちの保健室+命の感動体験	0
教育ボランティア+まちの保健室+プレパパプレママ	1

④自由記載にみる感想と評価（住民調査）

住民調査では、その目的である「地域住民は本学の現代 GP 事業をどのように感じ、今後のあり方についてどのような期待を持っているか、また、一連の事業において反省すべき点、改善すべき点はどのような点か」という観点から、評価を自由回答で求めた。

寄せられた自由記載の内容は様々であったが、自由記載欄を設けた設問ごとに、調査目的に関わるキーワードにもとづき整理した。選定した 4 つのキーワードとその趣旨を以下の表IV-4-5 に示した。

表IV-4-5 自由記載内容整理のために選定した 4 つのキーワードとその趣旨

◆「学生」… 本学現代 GP の取り組みは、学生が参加する教育活動を最も重要な柱としているため、まず「学生」というキーワードで意見を整理した。概ね好意的な意見であったが、ここでは、敢えてネガティブな意見をピックアップした。
◆「大学」… 本学の現代 GP 事業に参加することを通じて、本学が当該地域に存在することの意味について、どう感じたかが記載されたものを抽出した。
◆「残念」… ここでは、どちらかというネガティブな記載内容を取り出した。残念という記載の大半は、住民自身の都合が悪くて参加できなかったこと等への残念さを示すものであったが、今後の事業運営において参考になる内容も多々あった。
◆「続」… 地域住民による評価をもっとも端的に表すのは、一連の現代 GP 事業の継続が今後も期待されているかどうかであろう。そこで「続」というキーワードにより自由記載内容を抽出した。

上記のキーワードに基づき整理した具体的な記載内容を「住民調査」の「設問 3」「設問 4」および「その他の意見欄」ごとに、以下の表IV-4-6～表IV-4-9 に示した（アンケートの体裁、質問については p237 の資料IV-2 を参照）。

表IV-4-6 各種事業について、良くも悪しくも最も強く印象に残っていること（設問3）

◆キーワード「学生」により抽出した自由記載内容

- ・命の感動体験に参加しました。小学生の子供達と触れあうことはなかなかないので、親子とも有意義でした。ただ慣れたところに時間切れで少しものたりない思いでした。もっと半日とか長時間一緒にいたらお互いもっといい体験になったのではないかと思います。
- ・ロールプレイ（患者役）と患者教育発表会の2回参加させて頂きました。2回共に学生さんの一生懸命な真面目な態度に感心致しました。地域での保健教育指導の時、専門家の方の難しいお話より日常の健康チェックの内容などより親しみが持て身にしみるかもしれないと思いました。ただ発表の内容に何故その調査方法を取ったかという根拠がやや弱かったように感じました。
- ・教育ボランティアでの患者役としての参加が良かった。印象深く残っている。人を看護する職業を選んで学ぶ学生のひたむきな姿勢に触れ、いろんな患者のいる病室での対応を思うと、胸が詰まる思いであったが、人それぞれ違うんだという事を念頭において、精進してほしいと願った。看護師という特殊な仕事を選ぶのは、・・・心根の優しさを秘めているのでしょうか。病状については、最低限の知識は満でおくのが対応しやすいと思った。
- ・教育ボランティア。学生さんが当日10分ほど前に患者さん役の病気を知らされるということですが、私達のように先に相手の病気を知って対応するともっと前日から勉強されてよかったのではと思いました。
- ・教育ボランティアで患者役として参加させて頂き、自分の体験談とか学生2人でしたので聞きたい事をいろいろいって、私自身気持ちの晴れるものがありました。又一方学生2人共、頭をかしげ、私の問いかけがわからないというところもあり、患者の私で相手が医師の様に思って接していたが、ぜんぜんわからない所が多く、ただの学生で知らない事が多いのだなあと思った。
- ・テーマ発表の聞き役として参加しました。それぞれ選択したテーマは良いところをついていると思いましたが、全般につきこみ方が甘いように思い、その旨コメントもしました。学生と社会人との差で、やむを得ない点があると理解しますが、指導者サイドからもう少し現場の実際を教えてあげるようにすれば良いでしょう。

◆キーワード「大学」により抽出した自由記載内容

- ・アロマスプレー作り、マッサージ。看護大学の学生さんたちが、一生懸命勉強して、実践しているとうれしく思いました。
- ・命の感動体験は、学校の授業の一環として参加したので、大学が関係しているとは、参加してから知りました。5年生の子どもたちの嬉しそうな顔が見られたことがよかったです。
- ・大学生の方達が家に来て、たくさんのお話をした事で、色々と子供の事、地域の事がわかりました。
- ・大学に行ってスライドで地域の事を発表し、よくわかりました。
- ・教育ボランティアでは真剣に看護師を目指す学生が多くいることを感じたので、嬉しかった。他の事業もそれぞれ意味のあることと思います。地域につながった看護大学だということを強く感じました。
- ・看護大学の方の、命の感動の最後にしていただくワンポイントアドバイスは、とても好評です。お母さんの健康に関することが、日頃自身の体を気にする時間が少ないので特に為になります。
- ・聴診器で妊婦のお腹の赤ちゃんの心音を聴いたこと。

◆キーワード「続」により抽出した自由記載内容

- ・第1に教育ボランティア。学生方の真剣な取り組みを感じ、こちらが多く学ぶことができた。第2として、まちの保健室の一環で行った運動プログラム。学んだことを、できれば仲間とともに続けていきたい。継続することの効果を実感している。

表IV-4-7 各種事業で学んだことで、自身の日常生活で活用していること（設問4）

<p>◆キーワード「続」により抽出した自由記載内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・まちの保健室では骨量の測定、歯のお話等々。又、食生活サポートなどヘルスアップとタイアップして健康に対する意識が向上しました。ウォーキングもずっと続けています。毎日食事のバランスも考えて調理しています。 ・ウォーキングの姿勢に気を付けるようになりました。ただ、いつも完璧とはいえないので、継続指導がうけられたら（何ヶ月後かに）と思います。 ・「まちの保健室」の一環で行った運動プログラムは「イーグルトライ」の名で続いている。好ましいコミュニケーションの場である。最初のメンバーは減ったが、今後は増やしたい。 <p>◆キーワード「学生」「大学」「残念」に該当する自由記載内容はなかった。</p> <p>◆キーワードを含まない主な自由記載内容は「食生活に関心をもつようになった」「妊婦の大変さが男性パートナーに理解されたようだ」「体力測定での数値を参考に自分の健康管理に気を遣うようになった」「プレパパ・プレママセミナーの時の手作りパンフレットが毎日の育児に大変役立っている」「ウォーキング講習会で学んだ正しい歩き方を実践するようにしている」などであった。</p>
--

表IV-4-8 その他の意見欄の自由記載内容（キーワード「残念」「続」）

<p>◆キーワード「残念」により抽出した内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・これは参加したいなと思っても日程的に余裕がなくて、参加できないので、仕方がないことですが残念です。 ・3年前くらいに「まちの保健室」に行かせてもらいました。骨密度を測定してもらったり、丁寧なアドバイスがあったりで、とてもよかったです。次に行った時は人が多すぎて測定してもらえなかったのが残念でした。 ・命の感動体験。一番上の子は自分より年上という大人になってしまうので、お兄さん、お姉さんとふれあえる機会があってよかったと思いました。ただ、慣れていないのと、多勢でかまってもらったことに少しとまどいがあったようで、うちとけるまでに時間がかかってしまったのが残念です。 ・単独での外出が不可能となりましたので、残念ながら参加は無理となりました（色々行事のご案内はお手数ですので、除外してください）。ヘルパーさんの協力で生活している“ひとりぐらし”の老人の生活等、ご参考になる行事で、お越し下さる等にはご協力致します。 <p>◆キーワード「続」により抽出した内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今後もぜひプレパパ・プレママセミナーを続けて下さい。 ・これからもこの事業を続けて行って欲しいです。 ・数回教育ボランティアとして授業に参加したが、学生さんの真剣な様子にふれ、私自身、新鮮でとてもいい経験ができた。学生、地域住民、両者にとってとても素晴らしい試みだと思うので、出来れば今後もずっと続けて行ってほしいと願います。 ・今後も継続して実施していただきたい。 ・またこれからも続けて欲しいです（姿勢、ウォーキング、食育、ヘアスタイル、東洋医学、ツボ、お茶、マッサージなどセルフケアをテーマに）。 ・時々であるが、まちの保健室に参加させて頂いた。なるほどとその時は感心するが、すぐに日常に戻り、ふり返る事なく過ごしてしまう。継続は力なりはむずかしい。 ・今、小学1年生の子供が、5年生になった時、同じように命の感動体験に参加して、いろんなことを感じて、優しい心をもてるようになってくれたらうれしいなと思います。自分の妹弟以外の小さい子とふれあえる体験はとても良いことだと思うので、ずっと続けてくれることを祈ります。 ・どの事業も誘導、習得、定着、拡大と続けたい。大きな渦になっていくこと望みます。
--

表IV-4-9 その他の意見欄の自由記載内容（キーワード「学生」「大学」）

- ◆キーワード「学生」により抽出した内容
 - ・せっかく近所にできた学校だから、少しでも学生さんのお役に立つことがあればと思って参加したのですが、なにぶん高齢のため、体調や所用の都合と重なって行事日に出席できぬことが再三で、相済みぬ気がしています。
- ◆キーワード「大学」により抽出した内容
 - ・この度参加させて頂いたセミナーで、初めて看護大学の学内に入らせて頂きましたが、構内の雰囲気がとても良く、近所にこんなステキな所があったのかと感じました。いろいろな取り組みがなされていることも、この機会に知ることができたので、これから関心を持って、できれば参加できるものは参加したいと思います。
 - ・看護大学の方と接する機会は妊娠するまでなく、妊娠・出産を通していい出会いになったと思います。専門の勉強をされている方々なので、一つ一つの情報がとても参考になり、また、信頼性があるので安心して参加することができました。これからも交流できる機会を作ってもらえるといいなと思います。
 - ・赤ちゃんを抱っこ出来よかった。（カラーセラピーの折）看大に行くだけで若い先生や生徒さん（ベテランの先生）に触れられハッピーです。
 - ・看大のお茶会も七夕のしつらいでとってもよかった。看大に行けて知的好奇心を満足させられる。
 - ・以前の「運動継続プログラム」のように、半強制的に集まって、揃って様々な運動ができるようになればと思います。大学まで往復するだけでもいい運動になります。
 - ・ボランティアとはいえ、主催者側の行き届いたご配慮に先ず敬服した。看護大学なので、いろんな面での学びが必要であるが、患者役でのロールプレイは、何回か経験する方がいいと思った。
 - ・これからも開かれた大学を維持して下さい。水曜がちょっと出席できず、ボランティア活動ができなくなって心苦しく思っています。又、他の曜日になれば参加させて頂きたいと思います。
 - ・大学の活動や様々な事業は私に大きな刺激を与えて下さっています。今後もご一緒できることがあればうれしく思います。
 - ・落語は良かったです。大学として幅広いアイデアで活動範囲を拡げてください。
 - ・看護大学の学生さんは丁寧で親切で気持ちよかったです。
 - ・看護大学の近くに住んでいることの幸せを思い、幸運だったと喜んでます。ありがとうございます。
 - ・友人に聞いてから看護大学の体操教室に参加しています。時間の許す限り、健康のため行くことを日課として喜んでます。年齢を重ねても足、腰が悪くても困りますから元気で生きたいです。長く続けてほしいです。よろしくお願ひします。
 - ・6月の「高齢者とうつ」の場所が変わっていたことが、充分伝わっていなかった。いつものように看護大学であると思って、出かけたのですが、時間も場所もかわっていました。他にも何人かみえていたので、一応お伝えします。
 - ・是非とも定着させて頂いただけよう住民としてできることがあれば協力いたします。友人、知人を通してのピーアールもします。年2回ほど体力測定があればいいです。知らせは自治会を通してでもいいですが、グループの代表を通して知る体制も参加意識が生まれると思います。グループの代表は参加人数も報告すべきだと思います。

4) 地域住民による評価のまとめ

本学現代 GP の取り組みに対する地域住民からの評価は、複数の事業に複数回参加する住民が多いことや、最終年度アンケートの自由記載に見られた大学への高い評価によく反映されていると思われる。

また、本取り組みの半ばで行った地域住民評価会議における地域住民からの意見が、即

座に事業改善に役立てられたことも、最終アンケート結果における住民の満足度の高さにつながったのであろう。すなわち、大学が地域住民に一方的に事業を提供するだけでなく、常に双方向で、地元貢献型として全学的に取り組んだことが高く評価されたものと考えられる。

一方、地域住民の健康への関心は非常に高く、自治会などが実施している住民主導の健康増進活動に対して、大学側が様々な面でサポートしていくことが求められていることも確認された。これについては今後、地域住民の健康増進・医療関連活動の運営拠点を大学側が提供し、その上で専門的知識・技術による支援を行うことなどが課題として浮かび上がった。

今回得られた地域住民からの評価意見をもとに、本学現代 GP の取り組みで実施した各種事業の継続について吟味するとともに、地域社会における健康生活支援に関するニーズのさらなる掘り起こしに結びつけていきたい。

5.教員による評価

1)教員による評価の目的

現代 GP 取り組みへの参加状況と、学生への教育効果、教員自身の貢献度などに関する評価を明らかにすることを目的として、本学教員を対象とした調査（以下「教員調査」とする）を実施した。

2)教員調査の方法

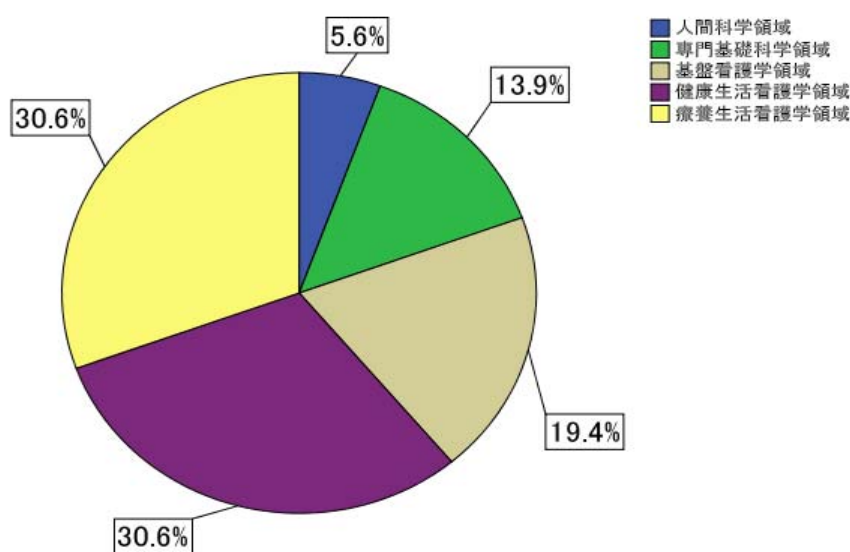
2008年10月時点で本学に在籍した専任教員全員を対象とした。教員調査は、2008年10月下旬に、全教員のメールボックスに無記名式の自記式質問紙調査票を配布し、約2週間の留め置き法で実施し、回答後、回収ボックスに入れるように依頼した（質問紙は p238～p239 の資料IV-3 を参照）。教員調査への協力は自由意志とした。

3)教員調査の結果および考察

配布総数は58部で、36部の回答が得られた（回収率62.1%）。有効回答率は100%であった。以下にその結果を示す。

(1)所属領域

回答者の所属領域は、健康生活看護学領域（11名、30.6%）と療養生活看護学領域（11名、30.6%）が最も多く、次いで基盤看護学（7名、19.4%）、専門基礎科学領域（5名、13.9%）で、人間科学領域（2名、5.6%）が最も少なかった。この割合は、全教員数に対する各領域の教員数の割合とほぼ同じであった（図IV-5-1）。



図IV-5-1 回答者の所属領域（教員調査）

(2) 「教育ボランティア導入」による教育効果

教育ボランティアに関わった教員の数は 36 名中 19 名 (52.8%) であった。内訳は基盤看護学領域の教員が 6 名、健康生活看護学領域の教員が 9 名、療養生活看護学領域の教員が 4 名だった。

表Ⅳ-5-1 に示したとおり、「教育ボランティア導入」が学生に及ぼした教育効果として、最も多くの教員 (68.4%) が「学習への動機づけが高まった」と考えており、「学びが深まった」がそれに次いで多く (63.2%)、「相手の立場で考えられるようになった」も半数以上 (57.9%) の教員が「非常に当てはまる」と答えていた。

一方、「看護実践能力が向上した」に対して「あまり当てはまらない」と答えた教員も 2 名いた。これは演習科目での患者役もあれば、ゲストスピーカーとして体験を語るボランティアもあるなど、必ずしも看護実践能力に直結しない教育ボランティアもあったためではないかと考えられた。

表Ⅳ-5-1 「教育ボランティア導入」による教育効果 (教員調査)

質問項目	全く当てはまらない		あまり当てはまらない		やや当てはまる		非常に当てはまる		わからない	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
①学生の学習への動機づけが高まった	0	0	0	0	6	31.6	13	68.4	0	0
②学生の科目の学びが深まった	0	0	0	0	6	31.6	12	63.2	1	5.3
③学生が相手の立場で考えられるようになった	0	0	0	0	7	36.8	11	57.9	1	5.3
④学生の人と関わる力が向上した	0	0	0	0	8	22.2	8	42.1	3	15.8
⑤学生の健康生活を支援する看護実践能力が向上した	0	0	2	5.6	11	30.6	4	21.1	2	10.5

(パーセントの母数は教育ボランティアに関わった 19 名の教員)

(3) 「ヘルスアップ作戦」による学生への教育効果

「ヘルスアップ作戦」に関わった教員の数は 36 名中 8 名 (22.2%) で最も少なかった。内訳は人間科学領域の教員が 1 名、基盤看護学領域の教員が 3 名、健康生活看護学領域の教員が 4 名であった。

表Ⅳ-5-2 に示したとおり、「ヘルスアップ作戦」による学生への教育効果として、3 名 (37.5%) が「学生が地域住民の主体的な健康づくりを学べた」について「非常に当てはまる」と答えていたが、その他の項目に関しては、「やや当てはまる」と答えた教員が最も多かった。

「地域住民が参加しやすい健康増進活動を企画・運営する能力が向上した」に関して、「あまり当てはまらない」と答えた教員が 1 名いたが、これは「ヘルスアップ作戦」では地域住民から選出されたヘルスアップ推進員の活動支援が中心となるため、直接学生の企画・運営能力の向上には結びつきにくい面があるからだと考えられた。

表IV-5-2 「ヘルスアップ作戦」による学生への教育効果（教員調査）

質問項目	全く当てはまらない		あまり当てはまらない		やや当てはまる		非常に当てはまる		わからない	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
①学生が地域住民の主体的な健康づくりを学ぶことができた。	0	0	0	0	5	62.5	3	37.5	0	0
②学生の地域住民が参加しやすい健康増進活動を企画・運営する能力が向上した。	0	0	1	12.5	5	62.5	0	0	2	25.0
③学生が地域の健康課題を考えることができた。	0	0	0	0	7	87.5	1	12.5	0	0
④学生が地区組織活動を支援する看護の役割を考えることができた。	0	0	0	0	5	62.5	1	12.5	2	25.0

（パーセントの母数は「ヘルスアップ作戦」に関わった8名の教員）

(4) 「まちの保健室」による学生への教育効果

「まちの保健室」に関わった教員の数は36名中32名（88.9%）と最も多かった。内訳は人間科学領域の教員が2名、専門基礎科学領域の教員が5名、基盤看護学領域の教員が7名、健康生活看護学領域の教員が7名、療養生活看護学領域の教員が最も多く11名であった。ただし1名の教員は教育効果に関する質問には無回答だった。

表IV-5-3で示したとおり、「まちの保健室」による学生への教育効果として、31名中7名（22.6%）の教員が「学生の地域住民とかかわる力が向上した」を「非常に当てはまる」と答えていたが、全般的には、「やや当てはまる」と回答した教員の割合が半数近くで最も多かった。

「学生が健康相談の実際を理解できた」を1名の教員が「全く当てはまらない」と答えていたが、学生自身が健康相談を実施したわけではなく、教員が実施する健康相談を見学しただけだったことから、このような回答となったのではないかと考えられた。「地域住民の健康ニーズが理解できるようになった」も同様で、健康相談を実際に行うことではじめて健康ニーズが理解できると考え、「全く当てはまらない」と回答したのではないかと推察された。

また、「まちの保健室」については、他の現代GPの取り組みに比べて、「あまり当てはまらない」と回答した教員の割合が、ほとんどの項目で2割近くあり、比較的多いことが特徴的である。このような結果となった理由としては、自由記載の中にもあるように、まちの保健室にボランティア参加する学生が非常に限られていたため、学生全般に対する教育効果という点で疑問を持たざるを得なかったからだと考えられた。

表IV-5-3 「まちの保健室」による学生への教育効果（教員調査）

質問項目	全く当てはまらない		あまり当てはまらない		やや当てはまる		非常に当てはまる		わからない	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
①学生が健康相談の実際を理解できた	1	3.2	6	19.4	12	38.7	5	16.1	7	22.6
②学生が地域住民の健康ニーズが理解できるようになった	1	3.2	6	19.4	13	41.9	4	12.9	7	22.6
③学生が教員と協力しながら取り組むことで企画、運営する能力が向上した	0	0	5	16.1	17	54.8	4	12.9	5	16.1
④学生がボランティアに興味をもった	0	0	6	19.4	17	54.8	5	16.1	3	9.7
⑤学生の住民とかかわる力が向上した	0	0	4	12.9	17	54.8	7	22.6	3	9.7

（パーセントの母数は「まちの保健室」に関わった 31 名〔無回答の 1 名を除く〕）

(5) 「次世代育成支援事業」による学生への教育効果

「次世代育成支援事業」に関わった教員数は 36 名中 11 名（30.6%）であった。内訳は人間科学領域の教員が 1 名、専門基礎科学領域の教員が 1 名、健康生活看護学領域の教員が 7 名と最も多く、療養生活看護学領域の教員が 2 名であった。

表IV-5-4 に示したとおり、「次世代育成支援事業」による学生への教育効果としては、すべての項目に関して半数近くの教員が「非常に当てはまる」と回答しており、「やや当てはまる」も含めると 11 名のうち 8 名（72.7%）から 10 名（90.9%）が当てはまると答えており、全般的に高い教育効果があったと考えている様子が見えられた。これは、「次世代育成支援事業」には「プレパパ・プレママセミナー」や「命の感動体験」「命の出前講座」「ピアカウンセリング」といった様々な種類があるが、自由記述からも読み取れるように、いずれにおいても学生自身のきわめて積極的・主体的な参加があったからではないかと推察された。

表IV-5-4 「次世代育成事業」による学生への教育効果（教員調査）

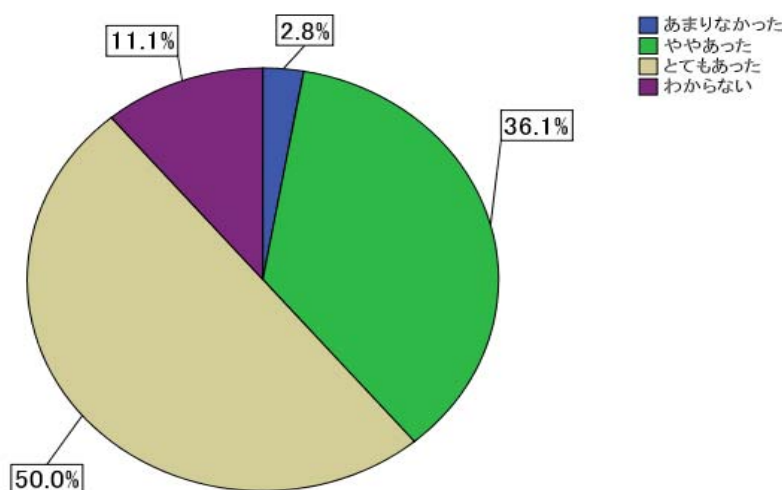
質問項目	全く当てはまらない		あまり当てはまらない		やや当てはまる		非常に当てはまる		わからない	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
①学生が子育て世代の人々、思春期、妊娠期にある人々との関わりを通して学校で学んだ知識の理解が深まった	0	0	1	9.1	3	27.3	6	54.5	1	9.1
②学生の次世代育成の看護実践能力が向上した	0	0	1	9.1	3	27.3	5	45.5	2	18.2
③学生が地域住民とのふれあいを通して主体的に学ぶ姿勢が身についた	0	0	0	0	4	36.4	6	54.5	1	9.1

（パーセントの母数は「次世代育成支援事業」に関わった 11 名の教員）

(6) 取組全体を通じての学生への教育効果

本学現代GPの取り組み全体を通じての学生への教育効果が、どの程度あったと考えるかを問うたところ、関わりをもった教員の半数が「とても（教育効果が）あった」と答えていた。また「やや（教育効果が）あった」と回答した教員と合わせると、9割近い教員（86.1%）が何らかの教育効果ありと考えていることが明らかになった（図IV-5-2）。

どの領域の教員が、取り組み全般を通じた学生への教育効果をどのように考えているかを知るためにクロス集計をおこなった（表IV-5-5）。その結果、健康生活看護学領域の教員が「とても（効果が）あった」と回答している割合が最も高いことがわかった。健康生活看護学領域の教員の関わりが特に多い現代GPの取り組みは「教育ボランティアを導入した授業」と「次世代育成事業」であり、上述したように、この両者の教育効果を「非常にあてはまる」と回答した教員の割合が高いこととも一致しており、主としてこの両者の教育効果の高さが全体の結果に反映していると考えられた。



図IV-5-2 取組全体を通じての学生への教育効果（教員調査）

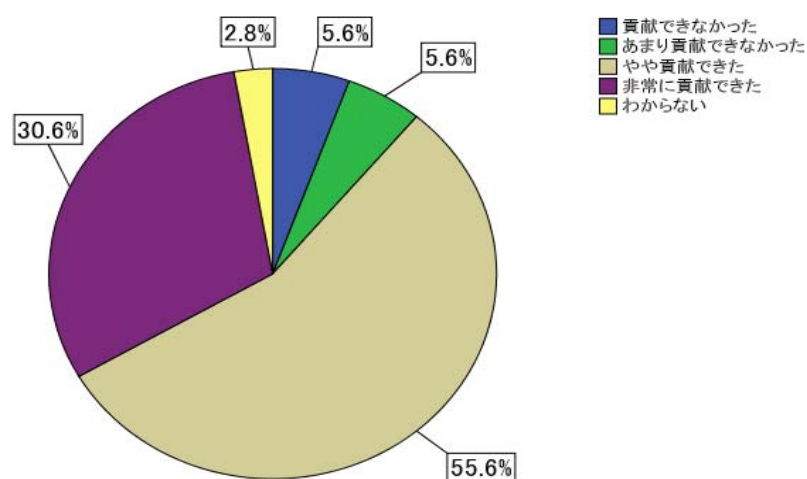
表IV-5-5 取組全体を通じての学生への教育効果と所属領域のクロス集計（教員調査）

所属領域	全くなかった		あまりなかった		ややあった		とてもあった		わからない	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
人間科学領域	0	0	0	0	0	0	1	50.0	1	50.0
専門基礎科学領域	0	0	0	0	3	60.0	1	20.0	1	20.0
基盤看護学領域	0	0	0	0	2	28.6	4	57.1	1	14.3
健康生活看護学領域	0	0	0	0	3	27.3	8	72.7	0	0
療養生活看護学領域	0	0	1	9.1	5	45.5	4	36.4	1	9.1

（パーセントは各領域の回答者全員を母数とした、各項目回答者数の割合を表す）

(7) 取組全体を通しての地域住民の健康生活への貢献度

教員による地域住民の健康生活への貢献度を問うたところ、最も多かったのは「やや貢献できた」(55.6%)が回答者の約半数。「非常に貢献できた」(30.6%)と合わせると、回答した教員の大半(82.6%)が何らかの貢献ができたと考えていた(図IV-5-3)。



図IV-5-3 教員による地域住民の健康生活への貢献度 (教員調査)

次に、どの領域の教員が、取り組み全般を通じた地域住民の健康生活への貢献度をどのように考えているかを知るためにクロス集計をおこなった(表IV-5-6)。その結果、教育効果に関する評価と同様に、健康生活看護学領域の教員が「非常に貢献できた」と回答している割合が最も高いことがわかった。

また、唯一、療養生活看護学領域の教員のうち2名(18.2%)が「貢献できなかった」と回答していることは特徴的だった。当該教員の関わっていた取り組みは「まちの保健室」のみであったが、「まちの保健室」の中にはさまざまな役割があるが、直接住民と関わることが少ない役割を教員が担当することもある。「貢献できなかった」と回答した理由は、そうした役割を担当したためではないかと考えられた。

表IV-5-6 教員による地域住民の健康生活への貢献度と所属領域のクロス集計 (教員調査)

所属領域	貢献できなかった		あまり貢献できなかった		やや貢献できた		非常に貢献できた		わからない	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
人間科学領域	0	0	0	0	2	100	0	0	0	0
専門基礎科学領域	0	0	1	20.0	4	80.0	0	0	0	0
基盤看護学領域	0	0	0	0	4	57.1	2	28.6	1	14.3
健康生活看護学領域	0	0	0	0	5	45.5	6	54.5	0	0
療養生活看護学領域	2	18.2	1	9.1	5	45.5	3	27.3	0	0

(パーセントは各領域の回答者全員を母数とした、各項目回答者数の割合をあらわす)

(8) 質問項目ごとの自由記載内容（教員調査）

①「教育ボランティアを導入」による教育効果

- ・学生と教員という、いわば大学内の”内輪”でない人が加わることによる緊張感や、求められる臨床能力は、教員にとっても多いに刺激となっていると思う。
- ・学生が高齢者の理解、特に歴史的文脈で人を理解するという、長い人生の結果として現在を生きているということの理解ができた。

②「ヘルスアップ作戦」による学生への教育効果

- ・ヘルスアップ活動のどの時期にかかわったか、どの地区にかかわったかによっても異なるので、必ずよい効果があったといい難い時もあった。

③「まちの保健室」による学生への教育効果

- ・ボランティアで参加する学生はいつも限られた人であって、参加しない人が大多数であった。学生への教育の一環という意味合いをもたせるならば、時間割も考慮されていたので、順番に学生が参加し、全員が何らかの学びを得られるようにしたほうが良かった。

④「次世代育成支援事業」による学生への教育効果

- ・助産学生のコーススタディにとっては、次世代育成事業は必要不可欠。学生の血肉となっている。9月のプレパパ・プレママセミナーの前後で、学生は大きな変貌をとげている。また、地域の人々のあいだでも、口コミで評判となっていることをよく耳にする。
- ・学生自身の自尊感情が高まった（自分の役立ち感）。目上の方へのていねい語などの使い方が上手になった（社会性がより育った）。社会の中の問題等を分析する力がついた。

⑤教員自身の地域住民の健康生活への貢献

- ・引きこもりがちであった子育て中の母親が、大学に来るのを楽しみにして来られるようになった。教育や研究の能力以外にも看護、助産、保健の臨床能力をもつ看護大教員だからこそ、事業の中で個別に支援が必要な住民に気をかけて、他の関係者につなげるなどの対応もできた。
- ・地域住民の健康維持への貢献、まち保の活動、教育ボランティアの導入で学生、住民双方に効果があったこと。
- ・まちの保健室で健康相談に応じることで住民の方をより身近にとらえることができたし、ミニ講義などを通じて多少住民の健康づくりに役立てたことは、自分にとっても喜びとなり良かった。
- ・教育ボランティアを導入した授業は、地域住民にも貢献できたと思っている（学生のみならず）。子育ての先輩（1才10ヶ月の児の母親）の話を聞いた6ヶ月児の母親が勉強になったと話していたため。

(9) 取組全体に関する自由記載内容（教員調査）

取組全体に関する自由記載内容は、「良かった点」「悩んだ点」「改善すべき点」の3つの観点で分類した。観点ごとに整理した自由記載内容を、以下の表IV-5-7および表IV-5-8に示した。

表IV-5-7 取組全体に関して「良かった点」（自由記載内容）（教員調査）

<p>「良かった点」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ GP 活動を通して学園都市の地域特性や健康ニーズが見え、自分自身にとっても学びになった。健康支援学実習 I での教育ボランティアの導入は（学生の）人と関わる力を向上させる上で有効だったと思う。 ・ 臨床実習に出る前に、教育ボランティアの妊婦さんと接する機会が得られ、生の声やその関わりについて学ぶことができるのは学生にとってとても良いと思います。 ・ 地域の人々と直接的にかかわれることは、自らの教育能力アップにもつながると感じた。 ・ 地域の住民の皆さんが、大学をやや身近に感じて下さったような気がする。市立の大学としては、全てではないが、重要な一部分と思う。 ・ GP のさまざまな活動を通じて、地域住民の皆様にも本学のことを認知してもらい、本学教員、学生と地域住民の接点ができ、交流が生まれたのはよかったと思う。 ・ 学年をこえた活動をすることで、経験者（上級生）が下級生と一緒にいき、学びあいつつ向上している（教員は指示や教育ではなく見守りの姿勢となる）。 ・ 神戸市看護大学の PR となったと感じる。大学や大学教員、学生と地域の住民との距離が近くなり、身近に感じてもらっていることが実感できた。
--

表IV-5-8 取組全体に関して「悩んだ点」「改善すべき点」（自由記載内容）（教員調査）

<p>「悩んだ点」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ メールマガジンは、本当にこれが役に立っているのかどうなのかがわからず（読んでくれているのか、何が良かったのかなどの反応がわからないため）、途中でくじけそうになった。中間評価をして改善点を明確にして、修正するなどの工夫が必要だったと今にして感じている。
<p>「改善すべき点」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ まち保への地域住民の参加数が少なくなってきており、地域住民のニーズがないのではと思った。（テーマや場所により参加者数が違うようですが・・・） ・ イベントやボランティア参加してもらえる住民の方がある集団に限定されているのは偏りすぎであると思う。 ・ 教員の GP 参加への「温度差」があったこと。学生ボランティアの参加が得られにくいこと。 ・ 評価の形をもっと洗練できれば教員の FD にもなると思う。 ・ 健康と生活に関する調査の結果を受けて、まち保やヘルスアップ作戦などの企画を考えると、さらに住民のニーズに応える内容になると思います。eラーニングについては、住民に働きかけてきたが、予想以上に協力、参加して下さる人が少なかった。 ・ 教育ボランティアを導入した授業は効果があるが、準備にも時間と労力を要するので、教育効果と労力を考え、継続するかどうか労力が少ない方法を工夫するかについて検討する必要があると考えている。

5) 教員による評価のまとめ

取り組み内容によって若干の差異はあるが、全般的に本学現代 GP の取り組みによる学生への教育効果は高いと考えている教員が多いことがわかった。また全般的に教員自身の地域住民の健康生活への貢献度も高いと考えていることが明らかとなった。

自由記述内容を要約すると、地域住民が大学の中に入ってくることが刺激となり、学生

の学びの深まりや成長、教員自身の臨床・教育能力の向上にもつながったのではないかと考えている様子がうかがえた。また、本学の現代 GP の取り組みが、そのまま地域住民に対する貢献にもなっており、そこから教員としての喜びも生まれていることがうかがえた。これらから、本学が実施した現代 GP の各種取り組みは、地域貢献という点でも大きな意味があったといえる。

さらに、今回の取り組みを通じて、地域住民と大学の距離が非常に近くなり、地域住民が大学のことを徐々に理解できるようになると同時に、大学側も地域住民のことを理解できるようになったことも大きな成果であると考えていた。

今後の課題としては、教員も学生も、現代 GP の各種取り組みへの参加度が人によってかなり異なった点や、取り組みへの関わり方、役割分担の仕方によって効果も大きく異なってくる点がある。また、それぞれの取り組みにおいて中間評価を行い、これをフィードバックして後半のやり方の修正へとつなげることができなければ、活動は漫然と続けられるのみで、取り組みに意味を見いだせなくなってしまう危険性もあることが指摘されていた。今後、さらに本学の現代 GP の取り組みを継続・発展させていくためには、時間や労力の負担や配分を考慮して、計画や方法を修正することも検討すべきであることが示唆された。

資料IV-1 学生を対象とした現代 GP の取り組みに関するアンケート（質問紙）

現代GP事業へ参加して下さった地域住民の皆様へのアンケート

1. 年齢を教えてください。当てはまるところに○をつけてください。

20歳代・30歳代・40歳代・50歳代・60歳代・70歳代・80歳代

2. 性別を教えてください。当てはまるところに○をつけてください。

男性 ・ 女性

神戸市看護大学 GP 事業では、以下の8項目 （内容の代表例）を行いました。 あなたの健康づくりに役に立つものでしたか？ 不参加の項目は、3をマークして下さい。	役に 立	役に 立た ない	不 参 加
◆ ヘルスアップ作戦 （ウォーキング、体力測定、栄養講習会など）	1	2	3
◆ 教育ボランティア （患者役として授業に参加、学生の実習の受け入れなど）	1	2	3
◆ まちの保健室 （骨の話、フットケア、健康相談、体力測定など）	1	2	3
◆ 命の感動体験 （お子様をお持ちの母親と学童とのふれあい）	1	2	3
◆ プレパパ・プレママセミナー （出産を前に、母親・父親としての体験）	1	2	3
◆ メールマガジン	1	2	3
◆ 健康づくりに関する講演会 （UNITYで行われた講演会 「地域の健康づくり街づくり」「笑いと健康」）	1	2	3
◆ 生活習慣と健康に関する調査 （各世帯へのアンケート調査）	1	2	3

3. 参加された事業の中で、最も強く印象に残っている内容（良かった事、良くなかったも含め）を教えてください。

4. 参加した事業の中で体験された事は、日常生活でどのように活用されていますか？よろしければ、その内容を具体的に教えてください。

その他、ご意見があればお書きください。

アンケートにご協力いただきまして有難うございました。

同封の返信封筒に入れて 2008年10月25日迄にご投函いただければ幸いです。

返信封筒に差出人住所・氏名をご記載いただく必要はございません。

神戸市看護大学 GP 評価部門

資料IV-3 教員を対象とした現代 GP の取り組みに関するアンケート（質問紙）

